2024. 3 No.215

平和文化

公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字　松井一實
広島平和文化センター会長

子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト 2023
6 歳～ 10 歳の部 平和首長会議会長賞／最優秀賞 受賞作品（末光雛さん作）
（詳しくは 7 ページをご覧ください。）

目　次

子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト2023
平和首長会議会長賞 受賞作品 …… 1
「核兵器廃絶に向けた赤十字国際委員会の取り組み」（榛澤 祥子）…… 2
被爆体験記「非人道的な核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて」（内藤愼吾）… 3
核兵器禁止条約第2回締約国会議に平和首長会議代表団を派遣 …… 4
ICAN新事務局長来広記念講演会／平和首長会議インターンシップ …… 5
子どもたちに平和文化を根付かせるための取組について
ー広島市総合教育会議における主な意見ー …… 6
“平和なまち”絵画コンテスト2023の入賞作品が決まりました／
資料館企画展「ともだちの記憶」／祈念館企画展「暁部隊 劫火へ向かへリ」… 7
令和5年日本語教育事業報告会を開催しました!／
「広島市民じゃけえ!」マラカイ・ネルソンさん（アメリカ）…… 8

（公財）広島平和文化センター　〒 730-0811　広島市中区中島町 1 番 2 号
TEL（082）241-5246（代表）　FAX（082）542-7941　E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
令和 6 年（2024 年）3 月／年 4 回発行　［URL］https://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

赤十字国際委員会（ICRC）は、公平で中立、かつ独立した組織で、武力紛争等で犠牲となる人々の生命と尊厳の保護を使命としている。核軍縮においても人道的アプローチの議論の進展に貢献してきた。
2011年に代表者会議で採択した決議では、①核兵器の使用によってもたらされる甚大な被害は対応不可能であり、②核兵器の使用は国際人道法の定める理念と一般的に両立しないことから、各国政府に対し、核兵器が使用されないこと、使用禁止と完全なる廃絶を目指す交渉を始めることを求めた。

核兵器廃絶に向けた赤十字国際委員会の取り組み

榛澤　祥子
赤十字国際委員会　駐日代表

〔はんざわ　しょうこ〕
2019年にICRCに入り、駐日代表部の人道調整顧問として人道原則および国際人道法の普及に努める。2023年6月より駐日代表に就任。ICRC以前は、外務省や国連難民高等弁務官事務所に勤務するなど、10年以上人道支援の分野に携わっている。

赤十字国際委員会（ICRC）の核兵器廃絶に向けた取り組みは、1945年まで遡ります。1945年8月29日、赤十字の外国人職員で最初に広島入りしたのは、ICRCのフリッツ・ビルフィンガーでした。翌日、東京にあるICRC代表部に電報を送り、現場の悲惨な状況を伝えるとともに即座の支援を要請しました。これを受けて、駐日代表として着任したばかりのマルセル・ジュノーは救援体制を組みました。ビルフィンガーの電報には、「30日に広島訪問、凄惨な状況。街は壊滅状態、病院の8割は全壊または甚だしく損壊。救急病院を二つ視察したが、状況は筆舌に尽くしがたい。爆弾の影響は信じがたいほど破壊的。回復に向かっているかに見えた患者の多くが白血球の減少などの体内の異常により突然危篤状態に陥り、膨大な数の人々が生死の境をさまよっている。周辺の病院には現在も10万人以上の負傷者がいると推定されるが、不幸にも薬や包帯が足りず。」と記されています。

ビルフィンガーに続いて、実際に自らの目で広島の惨状を見たジュノーが執筆した「The Hiroshima Disaster」の最後には次のような一文があります。「結論として、1ヵ月後とはいえ、この新しい兵器の劇的な結末を目の当たりにした者としては、今日の世界が、存続か消滅かの選択を迫られていることに疑いの余地はない。」世界で初めて原爆が使用されてからほどなく、ICRCは核兵器に対する明確な姿勢を表明し、各国の赤十字社・赤新月社に対して、核兵器は廃絶すべきであるという見解を伝えました。この姿勢は決して揺らぐことなく、現在まで続いています。

しかしながら、核兵器をめぐる議論は、伝統的に安全保障論や地政学的な議論が主流であり、核兵器は、国家や地域の安全保障を担保し、地政学的な均衡を保つための有益なツールとみなされていました。そのような中、2010NPT再検討会議直前の4月20日、当時のICRC総裁であったヤコブ・ケレンベルガーは、核兵器の使用によりもたらされる筆舌に尽くしがたい人的被害や人類の存亡そのものに対する脅威に言及し、核兵器のいかなる使用も国際人道法の規則と合致するとみなすことは難しいとしたうえで、人類の利益のために核兵器の時代に終止符を打つよう各国に訴えました。ICRCのこの声明に続いて、赤十字運動は、核兵器に対する以前からの一貫した見解を再確認し、廃絶に向けた取り組みを各国に訴えかけるとした決議を、核兵器廃絶を目指す4ヵ年の行動計画とともに採択しました。その後、核兵器の人道イニシアチブ（人道的アプローチ）の機運が高まり、人類を核兵器のない世界へと導く、核兵器禁止条約の採択・発効へと繋がっていきます。

昨今の不安定な世界情勢を受け、核兵器の使用を仄めかす威嚇が続き、核兵器を重要視する声が再び大きくなっていることを、私たちは憂慮しています。1945年に使用され12月末までに約14万人もの人命を奪った広島原爆の核出力は15キロトンでしたが、今日ではそれは小型核兵器に分類されるものです。核兵器の使用により生じるであろう人命救助などの膨大な人道ニーズに対応できる国や国際機関は存在しません。対策がとれないもの、対応ができないものは、未然に防ぐしかなく、核兵器が再び使用されることを防ぐには、廃絶するしか方法はありません。そのために欠かせない役割を果たすのが、核兵器禁止条約です。ICRCは、この重要な条約への署名、批准を、各国に引き続き働きかけていきます。

ICRC駐日代表部も、核兵器廃絶に向けた取り組みに力を入れています。そのひとつが、若者のエンパワーメントです。広島出身の高垣慶太さんは、広島、長崎で原爆救護に携わった二人のひいおじい様から使命を託されたという思いを持ち、核兵器廃絶に向けた活動を熱心に続けています。過去2回開催された核兵器禁止条約締約国会議にもICRCユース代表として参加し、各国政府代表の前でICRCの声明を読み上げたり、サイドイベントで各国のユースの中で被爆の実相を発言したりするなど大きく貢献してくれました。高垣さんの活動を通して広島のたくさんの人たちと知り合いましたが、そのうちの一人が被爆者の切明千枝子さんです。2021年9月に被爆建物である旧広島陸軍被服支廠を見学したのが、切明さんとの最初の出会いでした。被服支廠の近くで家族と生活していた切明さんが原爆投下後に見た広島の夜空は、片方が燃える炎で真っ赤な、もう片方がきれいな星が出ている二つに分かれていました。切明さんがいつも伝えているメッセージがあります。「平和なんて危ういものだと思う。ちょっと油断するとすぐどこかへ逃げてしまう。それこそ風船みたいに。だから、逃がさないようにみんなで捕まえてしっかり守っていかないと。」戦争を経験した切明さんのこの重い言葉を受け止め、これからも核兵器の廃絶に向けて、人道的アプローチを推進するためにICRCは力を尽くしていきます。

（2024年2月）

被爆体験記

非人道的な核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて

内藤　愼吾
本財団被爆体験証言者

〔ないとう　しんご〕
満6歳のとき、爆心地から1.7kmの自宅で被爆、家族7人のうち6人を失い、満14歳のとき天涯孤独の身となる。この悲惨な出来事を風化させてはいけないと、令和4年4月から被爆体験証言者となり、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願い証言を続けている。

1945年8月6日、満6歳の私は爆心地から1.7kmの吉島羽衣町の自宅で被爆しました。当日の朝は、澄み切ったきれいな青空の下、午前7時31分には警戒警報も解除され、いつもどおりの生活が始まろうとしていました。

消そうとしても消せないあの日の記憶

庭の防空壕の入り口で1匹の弁慶蟹を見つけ、これを捕まえようとしゃがんだ、その瞬間でした。私は突然の大音響の中で強烈な爆風に背中を押され、防空壕の中へ吹き飛ばされました。一瞬、周囲は真っ暗闇となり、顔面に吹き付けてくる砂塵や小石に耐えながら床にじっとうずくまり、この状態が早く収まってくれるよう祈り続けました。

やがて、爆風も緩やかになり、周囲がうっすらと明るくなるのを感じて、恐る恐る防空壕の外へ出てみると、私たちの住む町は全部の建物が爆風でペチャンコにつぶされていて、見渡す限り瓦礫の山と化していました。

ランニングシャツ姿で庭に立っていた父は強烈な熱線を全身に浴びて、大火傷をして真っ黒焦げになり呆然と立っていました。母は、自分自身も左の肩から肘にかけて大火傷を負っていましたが、つぶれた縁側の屋根の上で、髪を振り乱し必死の形相で瓦をはがしていました。その下には、4歳の弟と2歳の妹が生き埋めになっていたのです。全身血まみれの二人の幼子を両脇に抱えた母の後ろに、私が全身やけどの父を支えながら従い、自宅から約3kmはなれた吉島の陸軍飛行場の救護所を目指して避難を開始しました。

「市民が描いた原爆の絵」
（作者 吉村吉助／広島平和記念資料館所蔵）

瓦礫の山を乗り越えて広い道路へ出てみると、そこには大やけどを負い全身真っ赤に焼け爛れた人々の列がありました。体中の皮膚がむけてしまい、まるでぼろきれのように垂れ下がった両手の皮を身体の前にぶら下げて、うつむいたまま黙々と避難する人々の列が続いていて、とてもこの世のものとは思えぬ惨状でした。道端には瓦礫にはさまれて助けを求める人、力尽きてそのまま息絶えてしまう人の姿があちこちに見られました。川土手に出てみると川面には上流から流れてきた多くの死体が浮いていました。

しばらくすると、全身やけどの父の顔面はパンパンに膨れ上がり、まぶたが完全にふさがってしまい目が見えない状態になりましたが、何とか父を助けながら飛行場の救護所に着いたときは夕方ちかくになっていました。

そこには多くの被災者が詰め掛けてごった返していましたが、治療といってもやけどの表面の乾燥を防ぐための油を塗る程度のものでした。

この時、幼い弟と妹は母の腕の中で既に息絶えていて、治療を受けることもありませんでした。

私たちは飛行場の片隅の小さな防空壕に入ることが出来ましたが、ここへ入るなり父は眠り続け、8月10日の未明、そのまま息を引き取りました。

二人の兄の死

8月11日、被爆後消息不明であった2番目の兄と奇跡的な再会をし、私たち母子3人は、防空壕を出て20kmの道を歩き続け、宮内村の疎開先へ帰りました。久し振りで畳の上でぐっすり眠ることが出来、私は間もなく元気を回復しましたが、兄は、発熱、嘔吐、下痢を繰り返すようになりました。今考えると、急性の原爆症だったのかもしれませんが、その時は腸チフスと診断され、母子3人は病院に隔離され、兄は8月30日に母に看取られながら息を引き取りました。

母の死

9月に入り、母は建物疎開作業に出たまま消息不明となっている中学1年の兄を再び探し始め、10数日後、やっと見つけたのは、小さな箱に収められた遺骨と、「9月14日死亡」と書かれた紙切れでした。母はその場で泣きくずれ、しばらくは立つことが出来なかったそうです。

その後、母は仕事を探し、片道約2時間の電車通勤を要する広島市内の会社に女性工員として採用されましたが、この頃から身体は目に見えて衰えてきました。少々体調が悪くても薬を飲みながら1日も休まず働き続けた母は、1953年11月7日の未明、激しい頭痛に苦しみながら息を引き取りました。

戦後8年経っても母の体調が良くならないのは被爆の影響かもしれないということは、なんとなく感じられていたのですが、結局、死因は「脳内出血と過労による心臓麻痺」であろうということになりました。

この時、私は中学3年生。親戚に引き取られ高校を卒業すると同時に就職し、社会へと巣立つことができ、現在に至っています。

私の思い

人類史上初めて広島に投下された非人道的な原子爆弾に対する憎しみや怒りの気持ちは、いつまでも消えることはありません。しかし、憎しみから平和は生まれてきません。決して忘れることのできない憎しみや悲しみを乗り越えて、核兵器廃絶と世界恒久平和実現のため、被爆体験を次の世代に語り続けることが、今、私に課された重要な課題だと考えています。

核兵器禁止条約第2回締約国会議に平和首長会議代表団を派遣

会長 松井一實

第2回締約国会議に出席して（所感）

今回の締約国会議においては、各国政府関係者等に対し、核兵器のない世界の実現に向けた歩みを共に進めるよう呼び掛けるとともに、平和首長会議の取組をしっかりと伝えました。

また、会議への出席を通じて、改めて、核兵器は絶対に存在してはならないものであるとの思いを強固にし、今後は被爆者の平和への思いを受け継いでいく若い世代に焦点を当て、被爆の実相や核兵器の非人道性への理解を促進し、核兵器は二度と使わせないという決意を持ってもらうための取組に一層力を入れていきたいと考えています。

現下の国際情勢は非常に厳しいものですが、このような中でこそ、高い理想を掲げてその賛同者を増やしていくことが重要であり、１万都市の加盟に向けて、平和首長会議加盟都市の拡大を更に図っていきたいと考えています。

平和首長会議は、11月に米国・ニューヨーク市で開催された核兵器禁止条約第2回締約国会議へ松井一實会長（広島市長）、鈴木史朗副会長（長崎市長）、香川剛廣事務総長（本財団理事長）を含む代表団を派遣し、同条約の実効性を高めるための議論を進めるよう要請し、具体的な核軍縮の進展を求めました。

また、サイドイベントを開催し、核兵器のない平和な世界の実現に向けた気運を醸成しました。

核兵器禁止条約第２回締約国会議（一般討論演説）でのスピーチ

松井会長は、鈴木副会長と共に平和首長会議の代表として発言しました。核兵器を用いた威嚇が繰り返され、非核保有国と核保有国との間に不信感が高まっているという現実は、被爆者の核兵器廃絶への切なる願いを根底から打ち消しかねない事態であると指摘した上で、核兵器禁止条約の実効性を高めていく重要性に言及し、核兵器不拡散条約（NPT）と核兵器禁止条約が補完関係を保ちながら機能するための取組を進めるよう訴えました。そして、平和首長会議が市民の平和意識を醸成し、あらゆる暴力を否定する平和文化の振興に邁進していくとの決意を表明し、各国政府代表者に対し、核兵器のない世界の実現に向けた歩みを共に進めるよう呼び掛け、スピーチを結びました。

松井会長によるスピーチ

国連・各国政府代表等との面会

核兵器禁止条約の締約国であるアイルランド、カザフスタン、タイ及びオブザーバーとして参加していたオーストラリアの政府関係者と面会し、条約の実効性向上に向けた今後の取組や若者に対する教育の重要性等に関して意見交換を行うとともに、加盟都市の更なる拡大への協力を要請しました。

その他、国連事務総長、核兵器禁止条約第2回締約国会議議長、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）事務局長及び米国下院議員とも面会し、意見交換を行いました。

主催行事等

平和首長会議及びICAN共同サイドイベントの開催

「核兵器のない世界を求める市民社会の声」と題したICANとの共同サイドイベントを開催しました。

ICANのパーク事務局長の開会挨拶から始まり、KNOW NUKES TOKYOの中村涼香代表が進行しました。

被爆地からのメッセージとして、松井会長からの紹介を受けて、広島で被爆した箕牧智之氏が自身や家族の被爆体験を証言するとともに、世界の為政者に対し、戦争をなくし核兵器廃絶を目指すよう訴えました。続いて鈴木副会長からの紹介を受けて、長崎で被爆した朝長万左男氏がスピーチを行い、核兵器禁止条約の成立過程に関与してきた経験に触れるとともに、世界市民として世界の結束に向けて取り組もうと呼びかけました。そして、米国及びドイツの若者が取組発表を行った後、被爆者と若者の間で対話を行いました。

最後は、平和首長会議の副会長都市である米国・デモイン市のフランクリン・カウニー市長が、閉会のスピーチで同市の取組を紹介すると共に、平和首長会議への協力強化を訴えました。

サイドイベントの様子

平和首長会議原爆平和展の開催

同締約国会議の会期中（11月27日～12月1日）、国連本部において、会議出席者や国連関係者に、広島・長崎の被爆の実相や核兵器の非人道性、平和首長会議の取組について理解を深めてもらうため、平和首長会議原爆平和展を開催しました。

（平和首長会議運営課）

「ICAN新事務局長メリッサ・パーク氏 来広記念講演会」の開催

基調講演を行うパーク事務局長

2024年1月22日（月）に核兵器禁止条約が発効後3年を迎えるに当たり、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のメリッサ・パーク事務局長が、その原点である広島･長崎、そして東京を訪問しました。広島滞在中、パーク事務局長は、平和首長会議会長の松井一實（まついかずみ）広島市長と意見交換するとともに、広島平和記念資料館の視察、慰霊碑の参拝・献花、被爆者との面会等を通じて、広島の被爆の実相を実感し、理解を深めました。

1月20日（土）には、「ICAN新事務局長メリッサ・パーク氏 来広記念講演会」を、ICAN事務局長メリッサ・パークさんを迎える広島実行委員会の主催、本財団の共催で開催しました。パーク事務局長は、基調講演で、「被爆の実相が示すとおり、核兵器が人類を破壊へと導くことを回避するためには、核兵器の廃絶しかない。」と強調しました。その上で、核抑止論の脆弱性（ぜいじゃくせい）を訴え、「核兵器禁止条約に批准することが日本の果たすべき役割である。」と述べました。続く被爆者やNPT再検討会議派遣高校生等とのパネルディスカッションでは、被爆者の方々のこれまでの貢献に対し深く感謝の意を述べるとともに、「被爆者のメッセージを継承していく若い世代の活動が、過去の過ちを繰り返さないことにつながる。」と語り、若者を激励しました。

講演会には約200人の若者や市民が参加し、パーク事務局長と平和への思いを共有し、核兵器廃絶のために一人一人ができることを考える貴重な機会になりました。

（平和首長会議運営課）

国内外の職員による平和首長会議インターンシップを実施

平和首長会議では、国内外の加盟都市の若手職員等を広島に招へいするインターンシップを実施しています。本インターンシップは、被爆の実相を深く理解していただいたうえで、終了後、それぞれの都市が、事務局や他都市との連携を強化しつつ、平和に向けた取組を推進してもらうことを目的としています。

＜海外加盟都市＞

1月17日から31日までの2週間、平和首長会議の副会長都市及びリーダー都市のグラノラーズ市（スペイン）からモンツェラット･カタ･ラドさん、理事都市のウェリントン市（ニュージーランド）からフィービー・ロケットさんを受け入れました。お二人は、平和活動に熱心な広島市立舟入（ふないり）高等学校で、生徒たちとの交流も行いました。

被爆体験証言者の八幡照子（やはたてるこ）さん（中）とインターン２人

カタ・ラドさんは、「ヨーロッパ支部は、役員都市の10都市が毎月ウェブ会議で意見交換を行っている。今後は、平和文化月間の取組を進めたい。」、ロケットさんは、「ウェリントンで『平和の散歩道』を設けるなどしている。今後、原爆ポスター展も行っていきたい。」とおっしゃっていました。今後の各都市との協力関係の充実を期待しています。

＜国内加盟都市＞

1月31日から2月2日までの3日間、北海道から鹿児島県までの国内加盟都市19都市から、19名をインターンとして受け入れました。

「被爆の実相」や「核廃絶に向けた人道的アプローチ」について学んでいただくとともに、各都市の取組に関して相互に質疑・意見交換を行いました。

また、グループワークは、「今後加盟都市が行うべき平和推進事業」をテーマに行いました。各グループからは、「広島・長崎に派遣した中学生を地域の平和のリーダーとして育成したい。そのため、被爆地の子どもたちとの継続的な交流を考えられないか。」、「VRやARを活用し、戦争を追体験することができないか。」などの意見が出ました。

グループワークの様子

これらを通して、参加者からは「他の自治体職員とのグループワークや意見交換は、とても貴重な経験となった。」、「市民の平和意識醸成のために様々な取組を行っていきたい。」などの感想が寄せられています。

（平和首長会議運営課）

子どもたちに平和文化を根付かせるための取組について

― 広島市総合教育会議（令和6年2月1日開催）における主な意見 ―

総論

○ 持続可能な国際平和文化都市・広島を形成するためには、平和教育において、①広島の子どもたちが平和文化を身につけ、世界を舞台に活躍できる、②広島以外の、国内外の多くの若い世代が、広島の地で平和文化を実感し、学ぶ後押しをするという、二つの目標を、同時に目指していくべきです。その理由は、世界平和を構築するためには、日本全国および世界中で、平和文化を振興する必要があるからです。

○ このように、市民社会に平和文化を広めていく活動は、広島固有のものであって、広島市はそういう存在感を発揮するようになるべきです。発信し続けることは、大きな力を持ちます。

○ この場合の「平和」の意味は、戦争・紛争がないことは勿論（もちろん）ですが、あらゆる暴力を否定すること、すなわち、人々が寛容の精神をもって、穏やかに共存し、将来の希望を見出せるような社会を構築することも含め、幅広く捉える必要があります。そのため、スポーツや芸術なども、平和を実感できる、効果的な教材となります。

○ 平和文化を学んだ広島の子どもたちと、広島を訪れた国内外の若い世代とが交流・対話することにより、平和認識を相互に高め合う重要性から考えるならば、平和教育の二つの目標は重なります。平和を尊ぶ豊かな感受性や、いじめ問題なども視野に入れて、自己および他者への尊重・思いやりの精神を育むよう配慮することが大切です。

各論

○ 広島への修学旅行や、「ヒロシマ平和学習受入プログラム」等によって、受入を拡大することが重要です。その中で、広島の子どもたちが平和を発信することは、自身の平和教育としても大きな意味を持つので、受入への主体的な参加を、積極的に呼びかけていくべきです。

○ 修学旅行の受入拡充に向けては、広島で提供する平和教育のパッケージを充実しつつ、担当教員に学習効果等を広くPRしていくべきです。今後取り入れるメニューとしては、VRの活用や、学校間交流の充実も有用です。

○ 受入を担う「青少年ボランティア組織」については、学校教育と連携しながら拡大していくとともに、平和活動に必要となる実践的な英語に関する研修なども充実するべきです。さらに、学校の枠・年代を超えた人材育成の充実を目指して、私立学校を含めて、若い世代の平和ボランティアに係る一貫した枠組みを再構築するべきです。

○ 本市の学校教育においては、教員・予算を確保し、地域の協力も得て、「平和教育研究推進校」として先進的な平和教育の促進を図ることが考えられます。また、教員養成・研修の充実も重要となります。

○ 若い世代の平和意識向上を目標として、教育委員会と平和文化センターとが一体的に取組む新システムの構築に向けては、体制強化・予算確保が必要となります。

“平和なまち”絵画コンテスト2023の入賞作品が決まりました

平和首長会議会長賞を受賞した
愛媛県西予市の末光 雛さん(8歳)

＜末光さんのメッセージ＞
家族やみんなといつまでもなかよく手をつなぎ、笑顔のたえないそんな平和な日が、いつまでも続きますようにと願いをこめて、この作品を描きました。

平和首長会議の加盟都市、世界19か国115都市の子どもたちから4,766作品の応募があり、うち15作品を入賞作品として決定しました。

平和首長会議会長賞受賞作品は、クリアファイルにプリントし、国連の会議など様々な場面で、平和を訴えるために活用します。

また、全ての入賞作品は、作者のメッセージとともに、平和首長会議ホームページで紹介しています。いずれも素晴らしい作品ですので、是非ご覧ください。

平和首長会議 HP

（平和首長会議運営課）

広島平和記念資料館　企画展
ともだちの記憶

期間　令和6年（2024年）3月1日（金）～ 9月10日（火）
場所　平和記念資料館東館1階　企画展示室

ヒロシマを生き残った中学生たちには、亡くなった友達に対する後ろめたさのようなものがあります。それは、街を歩いているとき、愛する人と手をつないでいるとき、子や孫の成長を目にしたとき、親の老いを感じたとき、ふっとあの日のことがよみがえってくるからです。また、慰霊碑は、亡くなった友達に再会できる場所となっています。

今回の企画展では、遺品や絵、日記による記録、被爆者の映像による証言など様々な媒体を通して、少年少女の生死を分けた状況や、生き残った生徒の苦しみや負い目、そして友を思う鎮魂の願いを紹介します。

子ども達にも分かりやすい展示となっていますので、是非ご覧ください。

（展示構成）
- ともだちとの日々
- 生死をわけて
- 生き残って

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課
TEL（082）241－4004

資料館 HP

「8 月 6 日の空」
作者 切明 千枝子さん

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　企画展
暁部隊 劫火へ向カヘリ
― 特攻少年兵たちのヒロシマ ―

期間　令和6年（2024年）3月1日（金）
　　～令和7年（2025年）2月28日（金）
場所　追悼平和祈念館地下1階　企画展示室

太平洋戦争末期、陸軍の「特別幹部候補生」として船舶司令部（通称「暁部隊」）に配属され、江田島に集められた少年兵たちは、㋹（マルレ）と呼ばれた一人乗りのベニヤ板製モーターボートで敵艦を撃沈させる特攻訓練を続けていました。

しかし、死を覚悟していた彼らを待ち受けていたのは特攻ではなく、1945年8月6日の原爆投下でした。激甚な被害が生じている中、「本務を捨てても広島市の救護に立て」との命令を受け、急行した彼らは、死の街ヒロシマで何を見て、何を感じたのか。被爆者の救護に尽力した彼らの心情を通して、被爆の実相に迫ります。

展示内容

今回作成した約30分の映像作品を大型スクリーンに上映します。

また、暁部隊元隊員の軍服、胸章、水筒などの関連資料を展示するとともに、元隊員たちの被爆体験記18編をタッチスクリーンで紹介します。

さらに、南側エントランスでは、㋹艇の実物大レプリカ（長5.6m×幅1.8m×高1.0m）を展示します。

【お問い合わせ】
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
TEL（082）543－6271

祈念館 HP

令和5年日本語教育事業報告会を開催しました！

現在、広島市には2万人以上の日本語を母語としない外国系の市民が暮らしています。そうした方々が安心して快適に暮らせるよう、広島平和文化センターでは、日本語を学ぶ機会を提供し、日本語によるコミュニケーションを促進する様々な日本語教育事業を実施しています。

国際市民交流課HP

2月18日（日）に、SENDA LAB（広島大学東千田キャンパス地域連携フロア）で、「にほんごでつながる―外国人が日本で子育て」をテーマとして日本語教育事業の報告会を開催し、56名の方にご参加いただきました。

基調講演は、アメリカ・カンザス州出身のアシュリー・サウザーさんにお願いしました。パレスチナのガザ・ヨルダン川西岸地区で国際NGOの職員として勤務された後、現在教鞭をとる広島の私立高校では、約20年にわたって、海外の学生と日本の学生の交流や、日本の学生の海外研修を企画する等、国際理解教育を精力的に進めてこられました。また、日本で2児を育てた経験もお持ちです。

講演ではまず、外国に背景をもつ子どもたちが日本で自己形成を行っていく際に、「日本に同化するか。」、あるいは、「出自の文化やアイデンティティを尊重するか。」の選択を迫られる場面が度々生じる中で、大切なことは「どちらか」ではなく「どちらも」子どもの個性であり、尊重することだと強調されました。

外国系の市民が、周りと違う自分の個性や考えを大切にしつつ、日本人と上手くコミュニケーションを取り、相互理解を深めながら暮らしていくという姿勢を持つことも大切です。

同時に、日本人のみなさんも「違いを大切にする」社会づくりを意識していくことが重要です。文化の違いから、戸惑ったり、心無い言動に嫌な思いをしたりしている人がいる時、「郷に入っては郷に従え。」ではなく、「そうした訴えは、日本社会を多様に、より豊かに、変えるチャンスかもしれない。」と捉え、日本人が外国人と一緒に乗り超えてほしいと言われていました。

報告会の様子

また、「国際教育は平和教育」だと訴えられました。異なる考えを持つ相手と共に過ごし、対話して得た、「意見が違っても分かり合える。」と実感する確固たる経験が、争うことを踏みとどまり、平和を築くための鍵になると語られました。

講演の後、グループに分かれて車座になり、子育て中の外国人のお父さんたち、お母さんたちから、日本での子育ての苦労をどう乗り越えたか、また、子育て中の喜び等が紹介されました。メキシコ人で主夫のお父さんが、「日本では子育て支援の多くが母親向けに設計されていて困ることがある。それでは育児の母親偏重は変わらない。」と体験を話すと、日本人の参加者も共感するように頷いていました。

外国人市民が日本に持ち込む新しい風をきっかけとして、より良い日本に向かっていけるように、外国人と日本人が一緒に取組むべきことは、たくさんあるのではないかと考えさせられる報告会となりました。

（国際市民交流課）

～ウチも、ワシも～

広島市民じゃけえ！

―外国から来て広島市民になった人にお話を伺いました―

マラカイ・ネルソンさん（アメリカ）

2年前からワールドフレンドシップセンター（WFC：広島で世界の来訪者を受入れ、反核・平和を考える場所を提供するNPO）の館長をしています。

私のアイデンティティの核には、お年寄りや知的障害を持つ人のケアの分野で働く中で、自分でも気づきにくい、上から目線や支配欲求を見出し、他者の自己決定権を尊重する大切さを学んだことがあります。

WFCでも、様々な被爆者（勇敢に体験を語る人や静かに人生を楽しみ過去の傷を癒す人）や、様々な考えを持つ多世代の人と出会い、自分との違いと共通性の両方を受け入れ、お互いを尊重する大切さを感じています。

また、この約4カ月間、私は仲間と原爆ドームの前でパレスチナの平和を訴え、行きかう人と対話しています。私は、「パレスチナ人は、イスラエル人は、ハマスはこうするべき。」とは言いません。私は上から物を言う立場にはありません。私はアメリカ人として、アメリカの歴史と社会への責任を負って行動しています。この対話の場は誰にでも開かれていますので、あなたも是非来てみてください。

※これは短縮版です。全文はウェブ版でご覧いただけます。